

地域資源活用によるスポーツイベント開催と地域活性化について ～ツール・ド・美ヶ原（うつくしがはら）を事例として～

香川大学経済学部

高田晃平

目次

1. はじめに	4. 事例紹介「ツール・ド・美ヶ原」
2. 研究目的	4-1. 浅間温泉の沿革
3. 先行研究	4-2. ツール・ド・美ヶ原の開催
3-1. 地域活性化について	5. 考察
3-2. スポーツイベントについて	6. まとめ
	参考文献

1. はじめに

近年、地域活性化の手段として観光地において様々なイベントが行われている。地域特有の文化や立地といった資源を活用したイベントを開催し、県外からの集客を促す。県外者がイベントをきっかけに開催地へ訪れ、消費活動を行うことで地域産業の活性化の活性化に貢献している。しかしながら、そういったイベントを開催して、県外観光者が訪れたとして、それが地域活性化となるのだろうか。最近では東京マラソンなどのスポーツイベントが注目を集めており、地域活性化の手段として各地で取り組みが行われている。そこで、本稿では実際の地域イベントについて関係者へインタビュー調査を行い、地域イベントがどのように地域活性化につながっているのかを検証する。その際に、地域活性化の定義を先行研究から検討したうえで、「地域スポーツイベントによる地域活性化」を論じていく。

2. 研究目的

本稿の研究目的は、地域イベントの開催が地域活性化にどのような影響を与えているかについて事例研究を通して検証することである。ただ、地域イベントといっても芸術や音楽、スポーツなど様々な要素を用いたイベントが開催されている。そこで本稿では、自転車を用いたスポーツイベントについて取り上げる。近年、自転車が健康やエコといった点で注目されており、趣味としてサイクリングやレースに参加する人口が増加している。競技人口に比例して、サイクリングやレースによる地域活性化のスポーツイベントも増加しているが、スポーツイベントの開催による地域活性化の影響について研究されているものは多くない。

そこで、スポーツイベントの開催から現在の状況を調査することで、どのような影響を地域もたらすのかを明らかにする。研究方法は、具体的なスポーツイベントの事例を1つ取り上げ、実際に関係者へのインタビュー調査を行う。

3. 先行研究

3-1. 地域活性化について

ここでは初めに、本稿において用いる「地域活性化」について、既存の研究を概観しながら定義づけをおこなう。例えば、新川（2002）では 1970 年代から「まちづくり」や「むらおこし」等の「地域づくり」が地域経済開発にとって代わる形で、日本の地域経済の課題として注目され始めた。そして、従来型の経済成長路線や工業化による大規模開発に対する反省から、地域開発から取り残された条件不利地域における地域開発の展望という観点で、主に大都市圏以外の地域における新たな発展の方向として示されるようになったものを総称して「地域活性化」という用語が用いられるようになったとしている。その特徴を 3 点取り上げ、(1) 地域社会の維持発展を目指していること、(2) とりわけ地域における人々の暮らしを基礎において活性化を考えること、(3) 地域に即した資源を重視した活性化戦略を取る傾向が強いことを指摘している。新川では、地域活性化は地域社会の新たな目標を示すものであると同時に、地域発展の重要な手段の 1 つであると述べている。

また、是川（2003）では中心市街地を対象に活性化の評価に関する定義づけを、地域の保有する資源を経済主体がどのように活用しているか、そして、どのような成果を生み出しているかという視点で捉えることで、保有する資源を十分活用している場合は活性化の程度が大きく、活用されていない場合は活性化の程度が小さいと述べている。加えて、活性化を資源の活用という視点で捉えるためには、活性化の源泉となる資源（インプット）がどれだけ存在するかという投入の側面と、インプットを経済主体が利用することによってどれだけ成果（アウトプット）を生み出しているかという成果の側面の両面から行う必要がある。

以上の先行研究から、新川の地域活性化の定義を踏まえて「地域住民の参画を含めた地域社会の資源を活用した取り組み」と定義する。また、本研究では地域でイベントを開催する際に投入された資源とその活用方法、イベント開催による成果について明らかにする。

3-2. スポーツイベントについて

スポーツイベントとは、広義の意味では「スポーツを行うイベント」であるが、その内容は多種多様である。そのため、本稿ではスポーツイベントを「競技者向けスポーツイベント」と「観戦者向けスポーツイベント」に区別して取り扱う。両者を区分する特徴は、競技者と観戦者のどちらがイベントに参加するために料金を払うのかといった費用負担を軸とする。本稿で取り扱うスポーツイベントは、参加者が料金を支払う「競技者向けスポーツイベント」である。その理由として、観戦者向けスポーツイベントを代表とするプロ野球や J リーグは広瀬（2005）などによって、スポーツ・マネジメントとして近年盛んに研究されている。一方で、競技者対象のスポーツイベントは先行研究が少なく、どのようにイベントが継続しているのかが明らかになっていない。そのため、本稿では競技者向けスポーツイベントの定性調査を通して、イベントの開催プロセスを明らかにする。

4. 事例紹介「ツール・ド・美ヶ原」

以下では、長野県松本市浅間温泉で開催されている「ツール・ド・美ヶ原」と呼ばれるサイクルスポーツイベントを事例として取り上げる。このイベントは現在 11 年目で、ロードバイクなどの競技用自転車を用いて 21.6 km の上り坂を走るという内容で、募集人数 2,000 人を上回る競技者が参加している。このイベントの調査するに当たり、運営組織である松本市、浅間温泉観光協会、ならびに松本商工会議所へインタビュー調査をもとに事例対象の記述を行った。本研究のインタビュー時間は合計で 13 時間 15 分である。

4-1. 浅間温泉の沿革

浅間温泉の開湯は約 1,000 年前とされ、江戸時代には松本城下の温泉地であり、藩主の御殿場とされていた。当時は蚕の管理に適した風穴が浅間温泉の周囲の山地にあったため、養蚕業者が蚕種を買い付けに浅間に訪れており、宿場として賑わうようになった。明治時代へと進んでいく中で、1908（明治 41）年に現在の信州大学松本キャンパスに陸軍歩兵第 50 連隊本部が設置された。連隊本部が設置されたことで、最寄りの浅間温泉への宿泊者が増加する要因となり、宿泊業としての発展へとつながった。

1939（昭和 14）年に第 2 次世界大戦、1941（昭和 16）年に太平洋戦争が勃発したことで、山間部への集団疎開先として長野県に多くの県外住民や工場が移転された。戦後の昭和 30 年台に長野県で産業都市構想が掲げられ、戦前疎開地として残っていた工場や施設、人員とノウハウをもとに、輸出産業基盤の形成を目指した。現在の松本市は、精密機械工場が集積し、高度経済成長に伴って工場誘致を積極的に行った結果が実を結んでいる。

産業基盤の一つとして精密機器の生産が拡大することと比例して、浅間温泉への宿泊者が団体旅行や慰安旅行という形式で大勢の観光者が訪れていた。浅間温泉の東に位置する美ヶ原高原は、当時は山岳観光として知名度が高く、6 月にはレンゲツツジが満開になるなどが魅力であった。浅間温泉格旅館は、団体旅行者の増加に対応して、施設の投資によって事業規模を拡大していった。

しかしながら、1980（昭和 55）年ごろから交際費への課税の影響や、観光地の多様化で浅間温泉全体の団体需要に陰りが見え始めた。従来の団体旅行者を対象にした浅間温泉各旅館の事業形態が、経済成長に伴う観光地の増加と観光者のニーズの多様化によって観光地としての競争力を失った。更に、バブル経済の崩壊によって浅間温泉への観光者は激減した。その結果として、現在では廃業した温泉旅館を福祉施設としての活用、既存旅館でも施設規模を縮小するなど観光温泉地として衰退の一途を辿っている。

4-2. ツール・ド・美ヶ原の開催

そこで、観光地として集客を増やす試みとして、1989（平成 1）年に松本市役所が主催で「ツール・ド・美ヶ原（以下、ツールとする）」が開催された。急な舗装道を自転車で走

(2) 地域活性化について

って競うイベントが、松本市の隣接地域で行われていたため、松本市が類似のイベントを地域内で開催できないかと取り組んだことがきっかけと思われる¹。ツールは、第 1 回が 600 名、第 2 回が 800 名と参加人数が増加していったが、地元地域の協力を得ることができなかったことで、イベントの運営を継続することが困難となった。結果的に第 3 回目を開催することができず、ツールは中止に追い込まれた。

ただ、浅間温泉の観光者は依然として減少傾向であり、ツールの復活を要望する旅館の若者が市役所へかけ合った。そこで、地元観光協会が事務局となり、企画運営や、地元住民や関係団体に協力を求めてボランティアを集めた。2 年間の準備期間を経て、2000（平成 12）年にツールは復活した。ツールが復活した際に、受け付けを前日に行う 2 日間の日程でイベントを計画した。これによって、県外参加者の浅間温泉への宿泊を促した。この方式が成功し、毎年浅間温泉への宿泊者を生み出すことができた。

表 1：「ツール・ド・美ヶ原参加人数推移」

回数	年度	人数	回数	年度	人数
第1回大会	2000	1,122	第6回大会	2005	2,103
第2回大会	2001	1,162	第7回大会	2006	2,231
第3回大会	2002	1,630	第8回大会	2007	2,307
第4回大会	2003	2,089	第9回大会	2008	2,425
第5回大会	2004	2,364	第10回大会	2009	2,177
			第11回大会	2010	2,532

筆者作成

ツールの魅力を大きく 3 つ挙げると、地域住民や団体の協力による参加者へのサービスと、コースの過酷さと美しさにある。

ツールの参加者へのサービスは、地元小学生の手書きの応援メッセージやゴール地点での冷やしたトマトやバナナの提供、下山してスタートに戻ってきた参加者への豚汁を振る舞うなど、手作り感のあるサービスが特徴的である。地域住民らがボランティアやサービスに好意的に取り組む背景として、地元地区の公民館活動が積極的に行われていることが挙げられる。住民らは個々の町内会で会合や小規模の催しを行ったり、複数の町内会が協力して活動を行うこともある。日頃から地域活動に活発な住民が一定数各地区にいたことがこういったサービスにつながっている。

ツールの参加者は、走るコースに魅力があるために毎年参加しているともいえる。ツールのコースはスタート序盤に急勾配の上り坂が続く。普段練習していない人にとっては乗ったまま走ることができず、自転車を降りて上らないといけないため、当初は「きつ過ぎる」といった苦情があった。しかし、十分練習をしないと完走できないことが選手同士で話題となり、「1 度参加してみたい」という新規の参加者を増加させる要因となった。現在のツールでは「激坂」というキャッチコピーを付けて、コースの過酷さをアピールしている。加えて、ツールの開催される 6 月末は美ヶ原高原でレンゲツツジが満開となる。ゴー

¹ ツール・ド・美ヶ原よりも先に、1986（昭和 61）年に旧安曇村（現松本市）でヒルクライムイベント¹が開催されていた。

ル付近の標高は約 2,000m で、あたりを望む景色と高原一帯のレンゲツツジの美しさはツールの魅力といえるだろう。

また、松本商工会議所の行った 2005 年の調査では、参加者によって松本市にもたらされた直接的経済効果を 55,679,371 円と推計している。これに、家族や応援者を含めれば更に大きな経済効果を生んでいるだろうし、練習のために足を運んでいる参加者が年々増加しているという。イベントを継続することが年間を通じた浅間温泉への観光者の増加につながっているようだ。

5. 考察

以上の事例と是川 (2003) の議論をもとに、イベント開催による地域資源の投入、活用、開催による成果の順に考察を行う。特に、個々の利害関係者がイベントから受ける影響を踏まえながら、結果的に地域の活性化につながっているのかをしているのかを事例から明らかにしていく。

イベント開催に必要な不可欠な地域資源は人員、資金、開催地である。運営ボランティアは、観光協会と市役所が主体となり、住民や関係機関に働きかけて約 400 名のスタッフを動員している。運営資金は主催組織²からの拠出と参加者からの参加料、パンフレット内の広告収入などである。開催地は、浅間温泉付近をスタートし、ゴールの美ヶ原高原駐車場までの一般道を活用している。

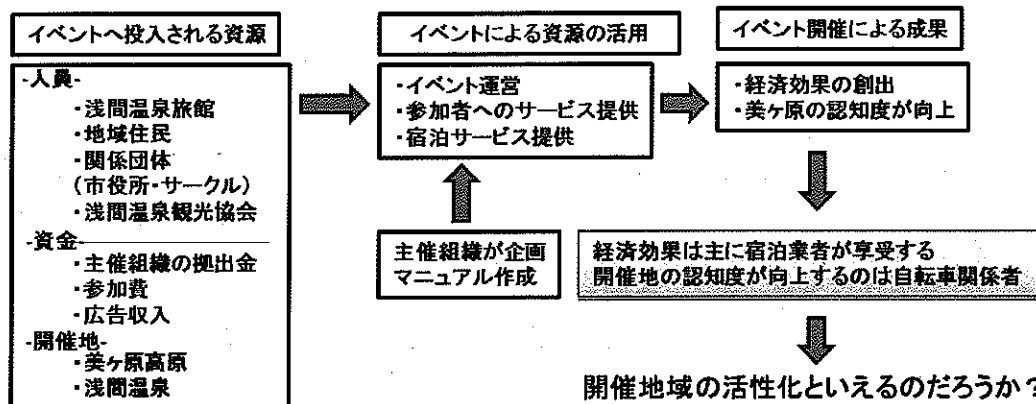
それらの資源を主催組織が計画して、具体的な活用方法を検討し、実行していく。まず、人員の活用は地域住民が警備や監視、ゴール地点でのサービスといった業務を担当するのに対して、市役所や関係機関は道路の清掃や違法駐車撤去など、専門的な業務を担当する。役割分担は、出来る範囲の事を出来る人が取り組めるように、主催組織がマニュアルを作成している。そのボランティアへの朝食や、防寒着の提供に始まり、必要な備品の購入やレンタル、参加賞のタオルや T シャツの発注などに運営資金は活用される。

ツールの開催が、多くのボランティアによって支えられ、提供するサービスと開催地の魅力が参加者の増加につながっている。加えて、イベントの継続がイベント以外の日にも競技者が訪れることに関係している。それによって、宿泊者を創出しており、浅間温泉旅館に対する経済効果につながり、「美ヶ原」という開催地の知名度の向上に貢献していると考えられる。

ただ、宿泊者による便益を得られるのは浅間温泉旅館や周辺の宿泊施設に限られるし、知名度の向上も自転車愛好家に限定されている。参加ボランティアも本郷地区 14,759 人中の 200 名程度である。11 年間継続して、地域に根付いたイベントではあるが、地域の活性化に結びついていると言えるか疑問が残る。だとしたら、なぜイベントは継続して開催され、地域の人々も協力を続けているのだろうか。

² 主催組織は、松本市役所、浅間温泉観光協会、信越放送、松本商工会議所、財団法人日本サイクリング協会である。

図 1: 「イベント開催による資源活用過程」



筆者作成

6.まとめ

本稿では、地域スポーツイベントと地域活性化の関係性を明らかにしようとした。しかし、地域におけるイベントの影響は限定的であり、地域の活性化と言えるのか疑問が残った。参加者の宿泊は、旅館にとって魅力的であるが、住民には直接影響を与えない。また、住民は町内会活動に積極的だったためイベントに協力的だったと考えられ、住民同士の交流機会創出につながっているものの、新たな結びつきを促しているとは言い難い。ただ、今回調査したスポーツイベントは継続して開催され、毎回参加者も増加している。

そこで上記の点を踏まえた上で、本稿のまとめとして、スポーツイベントによる地域活性化の在り方を再検討したい。今回の事例の背景にあったのは、観光者のニーズの多様化と観光地の提供するサービスが観光者のミスマッチによる観光地の衰退であった。主な産業が観光業であった場合、観光業の衰退は地域の衰退を意味する。浅間温泉はニーズの多様化に対応が遅れ、廃業や規模の縮小を余儀なくされた旅館もあり、地域の衰退が深刻な状態に陥った。

そういった状況の中で、今回調査したスポーツイベントは開催された。特定のスポーツ競技者に対するイベントは、多様化したニーズへのアプローチのひとつであった。従来の地域資源ありきのサービスではなく、ニーズに合わせたサービスの創出へ転換したという意味では、地域スポーツイベントは画期的な方法であったと言える。

加えて、スポーツイベントは地域の特徴を生かすことも出来る。例えば、ツール・ド・美ヶ原の急な地形を生かした「激坂」のキャッチコピーや、香川県の丸亀ハーフマラソンでは平坦な地形を生かして、国内で最もタイムの出やすいコースとして宣伝している。こういった、その土地の特徴を生かしながら、それを魅力とを感じるスポーツと組み合わせることで、衰退した観光地へ再び活力を与えているのではないだろうか。一つのイベントでは影響力は限られるかもしれないが、複数のイベントの組み合わせによって多くの地域住民がイベントに協力すれば、地域の活性化といえるのではないかと筆者は考える。

紙面の都合上、本稿では取り上げることが出来なかったが、イベントを継続して運営するための組織マネジメントも非常に重要である。開催地域で様々な利害関係者とどのように協力関係を構築するか、継続したイベントの運営に結びつけるかは今後の課題であろう。本稿の議論を踏まえつつ、研究を継続し、発展させたいと思う。

1. 参考文献

「浅間温泉-wikipedia」

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%85%E9%96%93%E6%B8%A9%E6%B3%89>>

(2010/10/22 アクセス)

原田宗彦『スポーツイベントの経済学 メガイベントとホームチームが都市を変える』平凡社,2002

広瀬一郎『スポーツ・マネジメント入門』東洋経済新報社,2005

是川晴彦「中心市街地の経済学的考察：経済理論によるアプローチと活性化指標の作成」

山形大学紀要. 社会科学 34(1), 191-204, 2003-07-31 山形大学

倉満智「日本社会における格差の広がりとその対策」香川大学経済政策研究 4,23-48,2008-03
香川大学

「松本市地域づくり推進行動計画」

<<http://www.city.matsumoto.nagano.jp/buka/seisakbu/seisak/osirase/tiikizukurikihonhosin/files/koudoukeikaku.pdf>> (2010/10/22 アクセス)

新川 達郎「地域活性化政策に関する市町村計画行政の課題と展望：東北地方の現状から」

同志社政策科学研究 3(1), 1-13, 2002-03 同志社大学

「ツール・ド・美ヶ原高原自転車レース大会-全国旅そうだん」

<<http://asp.nihon-kankou.or.jp/bnr/ctrl?evt=ShowBukken&ID=20202ba2210169052>>

(2010/10/22 アクセス)